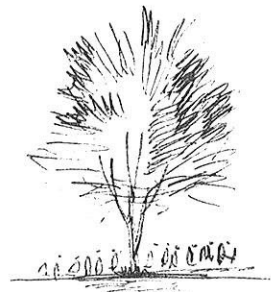


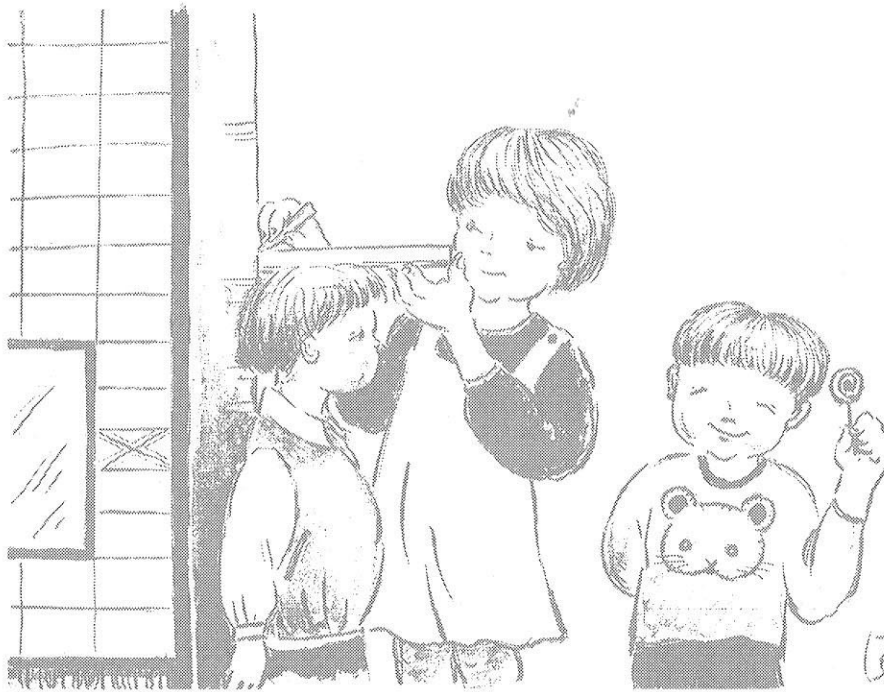
光の子



No.83 1999. 5. 1.

● わたしは世の終りまでいつもあなたがたと共にいる。

(マタイによる福音書 28章20節)



「せいくらべ」

え・中島英子

「日焼顔」

利根川の青土手近し麦を刈る

光より生まるる笑顔日焼顔

水の子になって泳ぎぬ風の子ら

さびしさは誰にも負けず油蟬

光より早くて蛭つかまへる

潜水のさびしき長さ泳ぎきる

プールより上がる少女の黒まなこ

落合 水尾 (『浮野』主宰)

耕作の季節

使徒言行録 14・16～17

しかし、神はご自分のことを証ししないでおられたわけではありません。
恵みを下さり、天からの雨を降らせて実りの季節を与え、食物を施して、
あなた方の心を喜びで満たしてくださっているのです。

理事長 福島 勲

暖かい陽ざしに長い冬枯れから目覚めた草木が一斉に芽を吹く。

イースターにふさわしい魅りの季節であり、耕作の季節でもある。

創世記四章にはカインとアベルの物語がある。カインは農作に従事し、アベルは牧畜を業とした。

二人はそれぞれの生産物を神に捧げるが、アベルの方は神に嘉みされるが、カインの捧げものは顧みられなかった。なぜなのか理由はかかれていない。カインの憤慨は弟のアベルに向かい、野原に誘い出して殺してしまふ。

耕作も牧畜もメソポタミヤでは古くから行われていた。

創世記二章十五節では、神がエデンの園でアダムに耕作させている。前三千年頃ウルクの都市では人口三、四万人はいただろうと学者はいふ。(中央公論社・世界の歴史)都市形成に食料の必要が当然考えられる。そして盛んに農耕が行われた。

牧畜も早くから行われていた。前三千年頃のもので、ウルの近くで発掘された石灰岩に牛乳を搾っているところが描かれている。

子牛を母牛の目の前におき、乳をしぼっている。乳腺に精神的刺激を与えるのだろう。素材だが工夫を凝らしていることが伺える。

学者の中には、農作物の捧げものはセム系(ユダヤ系)の思想にかなわなかったのだらうという。(レビ記九章二十四節、列王記十八章三十八節に、油したたる動物の捧げものが記される)

しかし、農作物を捧げるのはカルタゴあたりの様式であったといわれるが、古代ヘブル人にも認められた様式という学者もいる。

ここで農耕と牧畜とどちらを神は嘉みされるものか、なぜと詮索する必要はないようだ。

カインは憤って顔を伏せたが、神は呼びかけられる。正しいことをしているのなら顔を上げよといっている。これから推測すれば、問題はカインの心根であり、捧げる心の真実さが問われていると思われる。

今日耕作の方法や品質や収穫量は驚くべき発達をみる。季節でない季節を作り出し野菜や果物を産出している。人間は賢く、強く偉くなったのだ。だが、驕りたかぶってはいけない。

雨を降らせ陽を輝かせ、稔りを与えられるのは神である。

宮崎県椎葉の里での焼畑農についてのもので読んで感心させられることは、農家の人々の敬虔さである。

焼畑は素朴な原始的農業である。

山の本を切り、草を焼きとり種を蒔く、火余り(火事)しないように、よき稔りを与えられるように山の神に祈り捧げものをする。(文・佐々木章、語り・椎葉クニ・おばあさんの山里日記・葦書房)

現代つ子はこんな仕草を笑うかもしれない。

われわれとて現代科学を否定するわけではない。しかし自然の奥に潜む力、人知の上にある神の前に敬虔であることを願うのである。

アメリカのロッキーマウンテンの東側に住む人たちにある神話の一つは、ナイーブだが何かを語りかけている。

月と太陽が嫁を取ろうとしている。月は人間の若い子をめとるといふ。彼女が自分を眺めるとき、やさしくロマンチックに顔を向けていかにも可憐で美しいという。太陽は自分を見る彼女等の顔は、いつでも目をしかめ、引きつった顔で醜悪だといって蛙を嫁にしたという。(世界の神話を同読むか・大林太郎、吉田敦彦・青土社)

もちろんこの住民たちも太陽の効用を十分知っているはずである。

ただあまりに自己を輝かそうとする者に対する警告とも受け取れる。人よ驕るなかれ、謙虚であれ。

東北、特に裏日本側の東北の冬は寂しい。空は鉛色に押し黙り、冷たい雨はみぞれに変わる。冬に対する準備がまだあまり整っていない冬の入り口が、ことのほか、もの悲しい。まだそんなに厚着ではなく、みぞれの中を傘をさして歩いていると、最初手足が冷たくなり、ついで芯まで冷えそうになると、これからの長い冬ごもりのことなども思いわずらわれ、滅入ってしまうのである。

仙道 富士郎

山形大学医学部教授

冬から春へ

学者もどきのつぶやき ③⑧

北海道の冬も厳しくはあるが、こんなにも悲しくはなかったような気がする。日本の北端の炭坑街に医師のアルバイトに行っていた、遠い昔の記憶がよみがえる。

だるまの形に似ているのでだるまストーブと呼ばれる石炭ストーブを真っ赤になるほど燃やしても、部屋の建て付けが悪いので、背中が寒いぐらいである。濡れたタオルを夜外を持ち歩くと棒のように固まってし

まうという信じられないようなことも経験した。しかし、厳しくはあっても、もの悲しくはなかった。厳しすぎて、もの悲しいなどと悠長なことなど言ってられない状況とも言える。もちろん年齢のこともある。炭坑街の経験は三十歳前のことであるが、今、もう還暦を過ぎていて、淋しくもなろうというものではないか(こんなことを言うと、理事長の福島先生に二十年早いと叱られてしまいそうではあるのだが)。

東北裏日本の冬はおしなべてすべり、ついで芯まで冷えそうになると、最近気づいた。初雪が降って、それが溶けた頃にまた雪が降る十一月末から十二月一杯は、空が鉛色であり続け、気分は憂鬱でとりつく島もないといった感じである。ところが、新年を迎える頃になると、根雪になり、あたり一面が真っ白になる。そしてその頃になると、ときたまではあるが、太陽が顔を見せるようになる。こんなことは普通のゆつたりとした生活をおくっている人には当たり前のことで、取り立てて言うことでもないに違いない。四季折々の移り変わりに敏感に反応しながら、それを楽しんで来たのが日本人だったのだから。しかし、私にとっては何ともうれしき発見であった。学者

馬鹿も、年を取って少しは人間らしくなってきたということか。いずれにしても私にとっては大発見だったわけで、そうすると、今度はそのことがいつも気にかかってしかたがない。そうした眼で毎日を過ごしていると、太陽の顔を見せる頻度が次第に多くなっていくことに気づいた。

何ともうれしくて仕方ない。これは、愚妻といつも「低いレベルの喜び」と呼び合っている喜びに属するものだと思うが、小生達夫婦はどうも世事にうとく、普通の人にはごくた易いと思われることを、上手に出来ないことが希ならずある。たとえば、美味しいラーメン屋を教えられて行ってみるのだが、道に迷ってしまうことが多く、何とも難儀である。そんなとき、間違わないですんなりと店に辿り着いたりすると、小躍りして喜ぶ、何ともレベルの低い話で、自嘲的に、「低いレベルの喜び」と名付けた。馬鹿らしい話ではある。

そして、今頃(二月のはじめ)になると、本当の嬉しいことも待っている。庄内(山形県西部)で開業している医学部の卒業生のひとりが寒鰯(寒にとれる鰯が美味でこの名が付いている)を教室に送ってくれるのである。寒鰯に舌づつみをうつ喜

びだけを言っているのではない。毎年私たちのことを思いだしてくれる優しい心も嬉しいのである。今年はしけが続いて送る日にちが決まらず大変だったが、ようやく今日に決まった。優しい日の光を蔵王が浴びているのを眺めながら春を待っているこの頃である。



2つの文化に生きる

17

日本キリスト教団東大宮教会
バーガー 京子

子どもたちが日本の学校からアメリカンスクールに切り替えてからも半年が経とうとしている。あつという間の半年だ。この半年間、新しい環境の中で、親の立場からしてみれば、見るもの聞くものが新鮮で、ひとつひとつを楽しんできたというのが実感である。「新鮮」というよりも「懐かしさ」の方がびつたりとしている。東京都内とはいっても周りは畑や住宅がある中じつと建っているこの学校は歩入るとそこはアメリカである。教室の雰囲気、校庭の木立並木、キャンパス内に何気なく置かれたベンチ。現地アメリカの学校に比べると何もかもミニチュアなのだが、なぜかほっとするアメリカの風が吹いているのである。

日本人の私がなぜ、ほっとするのであるかと考えてみたら、やっぱり以前、アメリカ留学していた時を思い出すからだ。ほんの二年間だったにもかかわらず、私の中で強烈な体験として残っている。その緊迫感やすがすがしさ、誰もが「学ぶ」という同じ目的を持って同じ場所に集まっていることへの感動みたいなものがこみ上げてくる。なぜかわくわくしてしまうのだ。

勿論、私が行っていたのは大学で、子どもたちが行っているのは中学と高校なのでその違いは微妙にある。子どもたちは自分から進んで学んでいるというよりも、しなければならぬからしているといったやや受け身的な気持ちがあるのは仕方ないことだと思う。子どもたちにしてみれば、「宿題が結構多いんだよね。」とか「まあ、建物はきれいなんじゃないの。」「ランチブレイクが一番楽しいよ。」などと、私が感じている「感動」とはほど遠い、結構、さめた感想しか返ってこない。

それでも娘によく聞いてみると、「毎日がとっても楽しい。私と同じような人がいっぱいいるし。お母さんが日本人でお父さんがアメリカ人だったり、その反対だったり、ぜんぜん違う国から来たり...」

と、彼女なりに毎日をエンジョイしていることが窺える。

もともと在日宣教師の子どもたちのために約五十年前に建てられたこの学校は現在、幼稚園から高校までの生徒数四二〇人。そのうち、宣教師の子どもたちが七十パーセント、韓国人が十パーセント、カナダを始めとするその他十四カ国の国々から来ている人たちが十パーセントである。因みに我が家の子どもたちは二重国籍で、この場合アメリカ人の中に入っている。

学校規則はあまり細かいはないのだが、服装に関しては女子はタンクトップやミニスカートを着ないこと、穴の空いたジーンズなどは履かずいつも清潔にしていることなど、結構細かいところまで指導している。アメリカンスクールといってもその派手さはなく、けっこう地味なのが印象である。

地味と言えば、一見、地味な「コーラス部」があるのだが、これが、本当にすばらしい。昨年の暮れのクリスマスコンサート聞きに行ったのだがハイスクールの部が天使の声のようだった。何十人くらいいたのだから。その表現力といい、リズム感といい、大きな体の男子も女子もアカペラで次から次と歌う姿に涙が出るほど、感動してしまった。コンサート

の後の「持ち寄りケーキをいただくタイム」の時、指揮者である先生に本当にすばらしくて感動したことを伝え、今、コーラス部は部員がどんどん増えていること、一般に高校ではコーラス部は、何か、ここではみんなかつこ良く、ちょっと進んでるもの、という意識があつて、みんな熱心に練習に来ている、とのことだった。バザーやPTA会議、演劇鑑賞部、この半年間で出られる催し物には全て顔を出したが、まだまだ学ぶことが多いような気がする。これからも子どもたちと一緒にこの「学ぶ時」を大切にしていきたいと思う。



——お詫び——
八十二号の本連載記事中に「五体満足」とあったのは間違いで、正しくは「五体不満足」でした。訂正してお詫びいたします。
「光の子」編集委員会

エッセイ

トイレを楽しむ

息子たちが小学生だった頃だから、大分昔の事になるのだが、或る年の夏休みに出された宿題に「トイレを楽しむ」というテーマで何か研究のような者を提出したことがある。この宿題は、たぶん日常生活の中から改善や工夫の目を子どもたちに植え付けようという先生のねらいがあつたのかも知れない。うちの息子が、どのような改善や工夫をしたのか忘れてしまったが「トイレを楽しむ」というテーマがおかしくて、みんな大いに笑ったものである。トイレが楽しくてしょうがないという人も少ないだろうが、それにしても子どもにとっては余程楽しくない苦痛の場所だったのであろう。だから改善を試みたのだと思われるが、当人がそれを、クソまじめに考えていたのか茶化していたのか忘れてしまった。

今年の年明け、めでたい新年早々、私の家のトイレが詰まって、流れなくなってしまった。家内は、まるでその責任がすべて私にあるとでもいいたい口ぶりで「トイレが流れなくなっちゃいましたよ。何とかしなさい。現代の

日本では、男も女も同権であり、いろいろな機会も均等で、その責任分担も同等であるはずである。ところが私の家では、いつの間にか、このようなトイレの問題などは私が責任を持って解決することという不文律ができてしまつて、今さら逆らえないのである。

私は物置へ行って、半球形の黒いゴムに柄のついて道具を持ち出してきた。一つは単純な詰まりの場合に使うもの、もう一つは、なかなか手強いときに威力を発揮するものの二つである。

実は、今回、少々私は甘くみていた。したがって単純な方の道具を使つて、何度も圧力をかけてみた。たいていこの辺でドーンと流れて解決に至る筈だったが、今回はそう簡単にはいかなかった。もう一つの道具を使つて今度は本気で取り組んだ。スポン、スポンと水が外にはね出さないうように工夫しながら必死で圧力をかけたのである。

しかし、無情なことに、天は私に味方しなかった。何回やっても、汗を流して努力してもそれは結局、徒

労であつた。

もうこうなったらプロに頼る外はない。私は工事屋さんに電話した。「大至急お願いしたいんですが。」すると「いや、ちょうど緊急の仕事が入つてね。あした行きますよ。午前中に。」との事である。とすると、今夜はどうなるんだろう、という事になった。真冬の夜中にトイレが使えない。困ったものだ。

結局、家から少し離れたアトリエのトイレを使うことになった。

運の悪いことにその晩は、寒い西風が吹いていた。夜中の三時近く、私は家内と二人でその寒風の中に踏み出したのである。「そら、寒いから気をつけろ、冷たい風を直接吸いこむとまずいぞ。」私は家内に綿入れのを着せ、自分は厚手のジャンパーを着ていた。

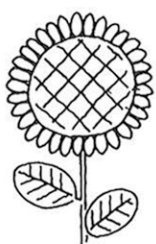
ところが、下半身は二人とも薄手一枚である。身ぶるいする程の寒さがしみこんで来る。私は家内を叱咤激励し、まるで嵐に立ち向かうかのように前進した。月は冴え冴えとして地上の霜のごとく降りそそいでいる。もしこの光景が映画の一場面で

あつたなら、まさに励まし合い支え合う美しい夫婦愛の姿であつたろう。ところが現実には、単にトイレを求めてせっぱ詰まつた、やけくその二人なのである。

しかし、寒い夜も永遠には続かない。予定通り夜は明けた。そして待望の工事屋さんも来てくれた。あつちこち調べてみたら、浄化槽のパイプの割れ目に木の根っこが入りこんでパイプを詰まらせていたのであつた。原因が分かれば修理は簡単である。思つたよりもあっさりと修理は完了した。

完全に水が流れるとなると、もう安心である。そうなると、何度でもトイレに行つて水を流して試したくなってくる。何となく嬉しい。昨夜の苦労などそのようである。

思い切り水を流せるトイレは、楽しいものである。「トイレを楽しむ」やはりトイレは、安心して使えるトイレは、楽しいものである。



プ・リ・ズ・ム

光の中で

佐藤家

田に水が入り、まだ幼い稲たちは、そこに空や雲を喜んで映しているようです。

さて、五月の連休は如何でしたか。洋は大好きな兄とママの待つ家に帰省することが出来、大喜びでした。思えば、この一ヶ月、彼らは激動の日々を送っていたのです。

母の元に兄が引き取られることになったと、兄弟に話があったのは四月一日でした。緊張した表情で話を聞いていた兄は、次第にボロボロと大きな目から涙をこぼし、「お別れするの?」「洋はどうするの?」「学校はどうするの?」と、少し泣きやみそうになると尋ね、また唇をかんでは泣くのでした。

母に引き取られる・それはとても嬉しいことです。母も子どもたちも、それを目指し頑張ってきたのです。でも、嬉しいことだけでは無いということを子どもはよく理解できています。就寝前にも「まり子さんに会いたくなったらどうするの?」

「お友だちは、どうやってつくるんだっけ?」「ママが死んじゃったらボクたち、どうすればいいの?」・・・たくさんさんの不安が表現されました。私はただ、「どこにいても、ずっと応援してるよ。いつでも会えるよ。大丈夫。」と、無意味な励まし方しかできませんでしたが、次の日には「ボクお皿洗いや掃除もできるよ」と、新生活に前向きな姿勢になり、堂々としていました。

そして弟は・「お兄ちゃんに会いたい・」と、毎晩のように泣き、抱っこされて眠る日が続き、兄が使っていたものを使い、兄の宝物を譲り受けた誇らしさを表現しながら、少しずつ『今』に慣れてきました。

別離を他人より経験せざるを得ない子どもたち。でも、それは他人よりその絆の尊さを実感し、感謝できる機会が多いことだと思えます。

そう願ひ、子どもたちを応援し続けていきたい。成長の夏がやってきました。 岩崎 まり子

河のほとり

倉沢家

彼は高校三年生の六月から今年の二月まで入院していた。

完治した・と断言しにくい心の病のためである。

入院の半ばに外泊が許され、登校してみたり努力はしたのだが、半年以上の入院のため、当然出席日数が不足し、卒業は出来なかった。

しかし、彼は、高校を卒業する、という意志を堅固に持っていて、もう一度三年生をやり直して卒業したい、という申し出をしてきた。

そんな彼の希望を何とか実現したくて職員会議に提案し、みんなの協力を求め、施設長の許可を引き出して、四月からの登校が実現しようという矢先、また調子を崩して再入院となってしまう。現在も彼は病と闘っている。

この病気の原因は彼自身にあるのではなく、彼が妊られる前後や出産にいたる時期の親たちの生活に依っているものと推測されるものである。ここまでに至った責任は彼には何一

つない、と断言できる。しかし、このような病を負った彼の人生は、この先輝かしいものになるだろう可能性はあっても極めて少ないだろう。むしろ、たくさんさんの困難や希望の少ないものであろう。

しかも彼は既に両親を失っている。頼りに出来る親類もない。少年と法が規定する時期も既に過ぎて、ここを出ていかざるを得ない日も近い。

彼の二〇年にも満たない人生の中で十四年間関わってきた者として、これから彼に何が出来ののだろうか。「病院に面会に行くと「おれのかーちゃん」と私を紹介している彼である。

かーちゃんにはなれないけれど、生まれてきて良かったと思える時間を紡ぎだしていくことが出来るならば、そんな時間を共有したいと心から思っている。 倉沢 智子



子どもたちの季節

仙道家

四月七日。新学期を明日に控え、子どもたちと夜桜を見に行こう!ということになりました。

ところが、午後になり、雷が鳴り始め、雨が降ってきました。その様子に、「今日、行けるかなあ」と、由花は心配そうです。環も「行けないじゃん。」と残念そう。

しばらく雷と雨が続きましたが、やがて虹が出てきれいに晴れてきました。どうやら、お花見は出来そうです。

いつもより早めに夕食を始め、みんなの後かたづけをして、さあ出発です。

幸手市の権現堂まで車二台で行きます。春とはいえ、夜はまだまだ冷えます。暖かい格好で出かけました。

権現堂の堤のわきの駐車場は車でいっぱい、たくさんの人たちが夜桜見物に来ている様子が窺えました。

溪子と紅子、富納姉妹、裕と藤本保育士が一緒で、一志と五木田さん、ネパールから実習に来ているビスヌーさんが一緒、そして由花と環は私と一緒に桜のトンネルの土手を歩いていきます。

夜の暗さの中で見る桜は、とても

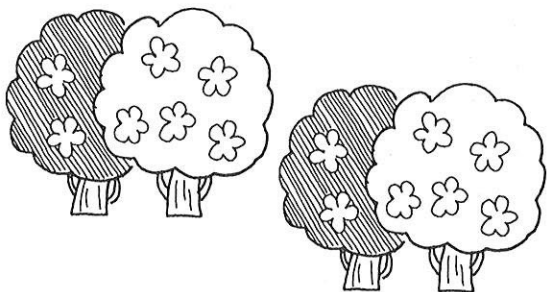
幻想的で美しく、うっとりします。

ところが、子どもたちは、というと、みんなより先に行った環が太い桜の幹に隠れて後から歩いてくる由花に、ワツといって驚かせたりしながらも、みんなたくさんさんの露店が気になるようです。

「ああ、お財布持ってくれば良かった」と、由花は欲しいものが買えず残念そうです。

でも環と私の3人で、たこ焼きを頬張り、バナナチョコにかぶりつき、夕食後のお腹はいっぱいに膨れました。

こうして仙道家一行様は、美しい桜と美味しい食べ物に満足して帰路についたのです。 池田 祐子



原田家日記

見るたびに、緑がふえていく季節。新年度の緊張も、ほんの少し、あるいは一気に、やわらいでくる頃だろうか。彼女にしてみれば、初めてはいてみたルーズソックスさえ、高校生としての「証」なのかも知れない。張り切る、という言葉は、こんな時に使うのだろうか。待ちに待った高校生活の開始。多歌声のチャレンジフルな日々が始まった。

予想を覆し、何と運動部を選択。

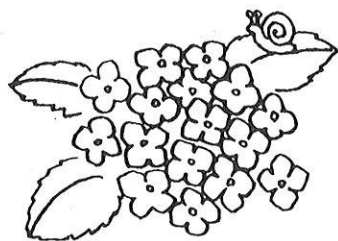
その決心は私を驚かせた。部活ぐらい、好きなことをやったらいいと、にこやかに言いつつ、これは本人にとつて、私にとつて、なかなかの重大事である。伴走する覚悟の必要だったこれまでの歩み、起こりうる、様々の事態を思いめぐらす。軽やかなフットワークや運動とは無縁、たくさん傷ついてきた、これまでの人間関係の下手さ。それらを私が代わりに引き受けるわけにはいかない。精一杯の生活の範囲をこれ以上、拡げることが可能なのだろうか。

一メモリずつ、グラフを伸ばすかのように、好調な日々が続く。と思っていると、逆転は意外に早く訪れた。帰宅を待っていると、いつの間にか

部屋に電気がついていて。いつもの元気な「ただいま」の代わりに、部屋の片隅でハンカチを顔に押し当てて、泣いていた。友だちに嫌なことを言われたという。話し終わると、またエネルギーを取り戻すかのように立ち上がられて笑顔に戻る。これから何回こんなことに出会うのだろうか。その夜、大きな声で「独り言」思っている、それは彼女の「祈り」だった。

社会に出るまであと3年。これまでの十二年の関わり、たった四分の一になってしまった。その間に、これだけを伝えたい。何があっても大丈夫!と。すべてはこれからと。暗い表情でいる時間がもったいない貴重な時間を過ごしている。

竹花 信恵



現場から

光の子たちと ⑫

3月14日日曜日の夜、子どもたちも大人も少しソワソワして落ち着きません。それは異国からの客人が、今来るか、今来るかと待ち受けているからです。その日はかりは、夕食後、いつもなら部屋に入ってしまった中高生もダイニングに集合です。和気あいあいとトランプなどをしてい

ると、その客人はやって来しました。その人の名はビスヌーさん。ネパールからいらつしやったその方は、現地語と英語は話せますが、日本語は全く出来ません。「ナマステ」と挨拶をされ緊張してしまった私は、「Nice to meet you」「How are you?」

などの簡単な英会話さえ頭から飛んでしまい、日本語で「初めまして」「長旅でお疲れじゃないですか」と言うのが精一杯。一緒にいらした日本在住のネパールの方に通訳して頂くという情けない有様です。

お二人の夕食が済んだ頃に施設長に促されて、子どもたちが順番に挨拶です。まず初めに、昨十二月にサンフランシスコに行った年長の紅子から。「Nice to meet

you」と言い握手。他の子たちもそれにならって全員、小学生の由花まで「Nice to meet you」と上手に挨拶できました。「さすがだなあ」と感心させられ、その晩は終わりました。

さて、翌日からです。仙道家には、英語ブームが到来しました。

二人の保母が英和辞典を新調した上、一日中英和辞典とにらめっこし、頭の隅の方で眠っている僅かばかりの英語の語彙や知識を呼び覚まします。一生懸命文章を組み立て話をしても伝わらないことは多く、悪戦苦闘の連続です。

そして何よりも子どもたちです。

英語というと、ちよつと後ずさりしてしまい、分からない単語を「辞書で引いたら」と促したって辞書など絶対に開こうとしない悠子、その彼女が夕食の時、ビスヌーさんの隣に座り、一生懸命ネパールのことについて尋ねています。ネパールは日本より大きいのか、人口はどのくらいか、りんごはあるのか、etc. ビスヌーさんはひとつ一つの事柄に丁寧にして誠心誠意、分かりやす

藤本 曜子

い英語で答えてくれます。その成果は、すごい！あの英語嫌いの悠子が、部屋で一人机に向かい英語の辞書を引くという姿を見せるようになったのです。

漢子は、ビスヌーさんが来てから、毎日のように手作りのおやつを作ります。クレープ、牛乳プリンなど。

遠来の客人を喜ばせたい、そんな思いだったのでしょう。学校から早く帰った日は、夕食前の一時を辞書片手にビスヌーさんと過ごす姿も見られました。

小さい子どもたちだって気がついて英語を話しています。「Good morning」と朝の挨拶をし、教えてもらったネパール語や英語の唄を一緒に歌っていました。

ビスヌーさんはネパールで、MORNING STAR CHILDREN'S CHARITYの施設長をしています。奥様と二人で四十七人の子どもの世話をしているそうです。そこで生活する子どもは九十九%は、親は全くなく、ストリートチルドレンだったということ

です。政府からの援助も全くない状態だそうです。ビスヌーさんのネパールでの一日は施設の子どもの世話、ストリートチルドレンの世話、と非常に多忙だそうです。そんなビスヌーさんは、愛情深い表情で、ホームシックにはならないけれど、子どもたちのことが心配でたまらない。施設を始めて十年間一日も休みがなかった、けれど、それは大丈夫、この日本への旅が私の休暇です。とおっしゃっていました。

戦後の日本を彷彿とするような状況の国から、日本に実習に来られたビスヌーさんですが、彼がこの国で得たことより、私たちが彼から得たことの方がずっと多かったように思います。全てのことを同じように考えるのは難しいが、子どもを大切に養育するという点、その原点を改めて教えていただくことが出来ました。いつも、もの静かで謙虚そのものを体現しておられ、寂しそうな子どもに特に心を配っておられたビスヌーさんが滞在して下さった三週間は、私たちにとつて、とても、とても大切な期間となりました。

そして・、仙道家の英語ブームはビスヌーさんとともに消え去っていきました。

ひかりのこ

養護メモ 78

子どもに関わる その2

菅原 哲男

赤ん坊の名は由紀と相談に来た産みの親たちがつけていた。

由紀とグループホームに暮らしている五人の子どもたちとの関係が、それぞれの違いが目を重ねるごとに明らかになってくる。

由紀の態度と子どもたちの対応が明確に違うのである。

特にその違いが、グループホームの子どもたちの育ってきた環境の違いによっていることが次第にはつきりしてきた。特に、子どもたちの乳幼児期の養育者との関係が、赤ん坊への対応の違いに影響していると考えられる。

たとえば、高校生の亜紀であるが、彼女は『世話好き』で、他の人のことは良く気がつき気遣うことが得意な女の子である。自分のことがそれくらい気がついてくれるといいのだが・と担当の倉沢に呟かせるのがしばしばなのだ。誰かの容姿や服装がほんの少しでも変わると、例えば髪型などに真っ先に気づくのが彼女である。その亜紀が由紀が可愛く感じなかったが。何やかやと話しかけ抱っこしたり大変なのだ。

その亜紀がある日、自分の部屋で哺乳瓶でジュースを飲んでいたというのだ。少ない小遣いの中から密かに買い求めたのだろう。

倉沢保母に抱かれ授乳させてもらっている由紀がたまに羨ましかったのだらう。そして、彼女にそのような乳幼児期がほとんどなかったことを思えば、そのことが無意識の基底に、満たされず、欠損として残っていたのだらうと思うのである。

また、高校三年生の嬉は、由紀がやつてきて半年ぐらい経ってから、夕食を摂らなくなった。肥っているからだという。しかし、彼は体育科の生徒で、毎日激しい運動の質量を他の誰よりも消化している。私たちは心配し、児童精神医の菅野ドクターに相談したほどなのである。

そんなある日、彼はすり下ろし林檎が食べたいと「林檎スリスリしてくれないか」と倉沢に訴えた。何でも食べてくれるように願っていたから早速それを与えた。

嬉しそうに、大事そうにそれを食べる彼は、まさにその頃由紀が離乳で、すり下ろし林檎を食べる様とびつ

たり重なったのだ。彼も、亜紀も大変な乳幼児期を過ごしてきたのである。

彼らに共通しているのは、自分が経験することなく通過してきた乳児期の大人との信頼関係や依存の様子を、由紀のそれに接することで、無意識の裡だと思いが触発され、欲求として表現されてきたことである。

先頃、米国デンバーから小舎制養育研究会が招聘してご講演を願ったヘネシー澄子氏の『愛着障害と思春期問題』の内容が彷彿とするのである。子どもが母親やそれに代わる大人に抱かれることの意味の重大さを、新生児から乳児期の二年間でその基本的な人格の七割程度が形成されるといふ具体的な報告を伺った。亜紀も嬉も、生まれてからここにやってくるまで、個別的継続的な養育者との関係を殆ど経験していなかったのである。

由紀は、亜紀に甘えることもあるのだが、拒否したりかんしゃくを起こすことなどがしばしばであり、嬉のことは半年過ぎても怖がるということが多かった。

一方、そんなに整っていたわけではないが、家庭から三歳を過ぎてやってきた沙慧や勇には、彼らが特に何を

抱かれることに全く抵抗がないばかりか、倉沢が家事に忙しくしている時など、殆ど沙慧に寄りつき、沙慧がいないと勇が相手をしていると機嫌が良かったのである。

この頃は、倉沢に叱られることもないのに、沙慧の席によりつき抱かれて食事をしている場面が日常化している。

倉沢家の子どもたちは、入所して以来、倉沢に十数年間一貫して担当され、共に生活してきた殆ど疑似家族のような関係である。

それでもこれほどの違いがあるのは、入所以前の養育者との関係がどれほどその人間の行動や人格に影響を与えるものなのかを深く考えさせられるのである。

この社会が、これまで、生活環境を整えることに心や力、時間などを使い果たして獲得した耐久消費財が無益だなどと言うつもりはないが、その購入のために生活の中から養育者が見えにくくなったことにこの国の大人たちは今こそ気づくべきではないだろうか、と思うのである。

由紀はこの三月、倉沢との養育縁組が浦和家庭裁判所に許可され、親戚にも披露され名実ともに親子になった。これは社会的養育の究極の一つの形なのだろうか、と思っている。

感謝

社会福祉法人光の子どもの家の設立準備会発足以来、中心的な役割を担い、初代の理事長として草創の困難を負われた福島勲先生が理事長を退任され、飯田進先生が新たに理事長に就任しました。

福島先生の存在なくして光の子どもの家の存在はありません。

長く任ぜられた日本キリスト教団荻窪教会の牧師を、児童養護施設光の子どもの家開設後間もなく退任され長野県の長門町に奥様と暮らしを楽しむご予約でした。それもかえりみるいとまなく、激しい反対運動を収められ、児童養護施設の働きを軌道に乗せるために、子どもや職員たちへの心遣いを惜しまれませんでした。

これまでのご苦労や、職員、子どもたちへのお交わりに心から感謝申し上げます。

ありがとうございました。

光の子どもの家

施設長 菅原 哲男

日誌抄 = 暮らしの風景 =

1998年 12月 1日 ▶ 1999年 2月末日

- 12月 幼児 6名 小学生 5名 中学生 9名 高校生 10名
措置外 3名(求職者2名 未自立1名)
- 1日 山梨県児童相談所などで相談事業に関わっている方々14名が来訪し見学と懇談。
- 4日 越谷児童相談所より3名来訪 情報交換と協議
- 7日 中央児童相談所より4名来訪し情報交換と協議
- 12日 蓮田市あすなろ文庫クリスマス公演に永野三恵氏のご招待で 楽しいひととき
- 17日 紅子がサンフランシスコに初めての海外生活へ
- 21日 大利根町東婦人会が今年も町内募金を多額の越年資金としてご寄付下さる 感謝
- 22日 大宮市のスナック「オレンジピール」がクリスマスチャリティパーティを今年も 多額のご寄付 感謝
- 24日 クリスマスイヴ キャンドルサーヴィス
- 25日 クリスマス ページェントとお祝いの会 学校 教会 お友だち 後援会などたくさんのお客さんと
- 28日 おもちつき
- 30日 お正月帰省始まる 1月4日まで
- 31日 年越し

今月の物品ご寄贈者 鷺宮町松本氏 町内リバー美容室 小林熊治氏 坪井しげ氏 関根たけ氏 駒宮肇氏 藤幼稚園江森理事長 加須市江口敏一氏 梓沢あずさ氏 島崎なぎさ氏 大宮市山ノ下恭二氏 (株)ステラ杉野健二氏 杉本英夫氏

- 1999年1月
- 1日 全職員と残っている子どもたちが元旦礼拝を捧げおせちで新しい年を祝う会 金子後援会長 梅沢三保氏などからのお年玉を みんなに
- 5日 荒巻幸子氏とケンちゃんが駆けつけてお正月気分をぶっ飛ばし3学期を迎え撃つ会を 楽しく
- 7日 所沢児童相談所より3名が来訪し情報交換と協議
- 8日 始業式
- 15日 菅野クリニック菅野院長が来訪
- 16日 中学校教師との協議会
- 17日 佐藤摂剣道3段合格
- 24日 米国デンバーよりヘネシー澄子博士来訪 交流と現任訓練としての研修を

今月の物品ご寄贈者 町内土屋欽一氏 丸山長義氏 オオタニ 2月

- 8日 後援会新年会 島田町長も駆けつけて
- 9日 県立高校推薦入学合格者発表 中山幸太郎が合格
- 19日 郡山市針生ヶ丘病院より高山嬉8ヶ月ぶりに退院
- 26・27日 県立高校入学試験 西沢つばさ 細淵野宜江が

今月の物品ご寄贈者 立正佼生会 蓮田市の永野三恵氏 北川辺町の増田博氏 荒井喜久一氏 津市の田口治氏 久喜市の富士見乳児院 町内坪井しげ氏 関根タケ氏 オオタニ(くら)

反 射 光

☆梅雨空の下、風景が押し潰されそうな日が続きます☆開設以来の重責を担われて苦労以外何のお報いもできないまま福島勲理事長がこの三月退任され、私たちの大先輩で開拓的な取り組みを展開されておられる飯田進理事長をお迎えし、新たな思いで子どもたちへの関わりを続けております☆本号の巻頭の記事はこの春理事長在任中にご執筆されたもので肩書きも理事長として掲載しました☆本紙八一号の日誌抄九月八日の記事を「後援会役員と原道婦人部共催の夕食会」と、お詫びして訂正いたします☆「光の子」の発行は開設以来の遅れでした☆これまで、人との出会いを基点にして生活を創ることの中に博打のような危うさを含んでいることを思い知らされてきました☆誰がどこでするどんな暮らしも、そんな危うさを土台にしています☆その危機に臨んだ誰がどんな対応をするのが、その人の人間性を表現します☆発行の遅れをお詫びし、初心生涯を心に銘じて励みます☆乞うご支援を!

(哲)